

終活イベントとそれに参加する人々の研究

吉田 真彩

近年、「終活」という単語を耳にすることが多い。高齢化や核家族化、都市部への人口の移動、人間関係が従来のものから変化してきたことに伴い、自身で老いや死について考え、準備する必要があるという風潮が生まれてきたのである。2009年に週刊誌によってつくられた概念であり、現在では関連商品が発売されたり、やセミナーなどが全国各地で開催されたりしている。

終活に関する研究は過去に数件あるが、多くがメディア研究であったり、「終活」というものの自体の研究であったりすることが多い。当事者に関する研究もあるが、質問紙によるアンケート調査であり、回答の理由などの記述はなく不十分であるように思われる。そこで、どのような人々がどのような目的で終活を始めていくのか、実際の環境はどのようなものなのかという点に着目したい。

本研究では、2019年5月から11月にかけて、フィールドワークと半構造化インタビューを用いて調査を行った。終活イベントと銘打ってあるもの14件と、それ関連するとされるイベント3件に参加しフィールドワークを行った。また、その中でも詳しく話を聞くことができた2名の方に半構造化インタビューを行った。

本研究の調査から、以下のことが明らかになった。①終活を始める動機は、「迷惑をかけたいため」であることが多い。ただし、終活の過程ではその人の死生観や信念などに基づいて行う場面も見受けられる。②終活の場ではコミュニティが形成されることがある。このコミュニティは、親しすぎず他人過ぎずというものであり、自分の思想や意見が色濃く出る終活において有意義であるように思われる。これにより、人生の豊かさが増したと感じる人も多い。③終活において重要視される概念に「共有」というものがある。これは、単なる事実の共有ではなく、自分の思想を伝え合ってお互いに理解し合う、という意味合いで使われている。④終活イベントでは体験型のイベントが多く存在する。これは、終活というものが、内容の理解だけではなく、実際に行動に移すことが重要とされるためだと思われる。⑤企業や法人が主催する終活イベントの中には、セミナーに参加してもらうことで自らのサービスの宣伝を主とするものも存在する。しかし、参加者側は「そのイベントが充実していた」という実感がある以上、あまりその点を重視していないように思われる。

以上の点を踏まえ、終活を通して参加者が得ているものは、安心感や充実感であるように思われる。それは、新たな価値観を得て感じるものではなく、参加者の不安を取り除くことにより、見えなくなっていたものを実感させ、よりよい終末期を過ごせるようにしているのではないかと考えられる。

(指導教員 照山 絢子)